

優秀賞

誰かのためにできること

熊本県 鹿本小学校 六年
菊田 銀之介

僕は、地元の少年野球チームに所属しています。週4日の練習はもちろん、練習日以外での自主練も日課となっています。平日はお母さんが、週末はお父さんが、朝早くから夜遅くまで僕のために時間を作ってくれているおかげで、僕は好きな野球に思う存分専念することができています。

練習方法はさまざまですが、僕が一番好きな練習はやっぱりバッティングです。ホームランを打ったかのようにボールが高く飛んだ瞬間は、まるで自分が大谷翔平選手にでもなったかのような気分になります。ただ、僕の家には当然高いフェンスもなく、去年の誕生日に買ってもらえたバッティング用ネットも出番のないまま段ボールの中で眠っていました。

素振りをする僕を見ていたお母さんが、

「隣のおじいさんに、場所をかせてもらえないか聞いてみようか。」

と言ってくれました。そのおじいさんの家は大きなお屋敷で、とても広い畑もあるお家です。少しだけ野菜を育てておられ、麦わら帽子をかぶって畑作業をされている姿が印象的な方でした。登下校のあいさつ程度でしか話したことがなかった僕は、

「使わせてもらえるかな？」と、少し不安な気持ちになりました。

次の日、学校から帰った僕にお母さんが、

「畑、使っていいって！」

と、興奮気味に教えてくれました。僕は急いでお礼を伝えに、おじいさんの家に走りました。玄関のチャイムを鳴らすと、優しくおじいさんが出てこられ、

「好きなだけ使ってええで。なんか必要なら、そこに置いてある物も使ってええよ。」

と、やわらかい声で話しかけてくれました。話を聞いていくと、なんと、そのおじいさんの息子さんは元プロ野球選手だったらしく、

「懐かしいわあ。銀之介君が練習してるの、いつも見よったんよ。息子のこと思い出したわ。」

と、優しく教えてくれました。その日から思う存分バッティングに専念することができ、そのおかげで、チームの足を引っ張ることなくバットを振ることができています。

おじいさんはよく、

「こんくらいのこと、いくらでも言ってこい。」

と、なんでもないことのように言ってくれます。でも僕にとっては、とてもすごいことです。僕にできることは、おじいさんの畑の伸びてきた草をとることと、試合でホームランを打ち、おじいさんに報告することです。

90才を超えられているおじいさんにとって、僕がおじいさんの夢となり、日常の楽しみになり、おじいさんがくれた温かい親切の恩返しになればいいなあと思いました。

「こんなに楽しい夏、久しぶりやわ。」

と笑うおじいさんのうれしそうな顔を見て、僕はもっとうれしくなりました。